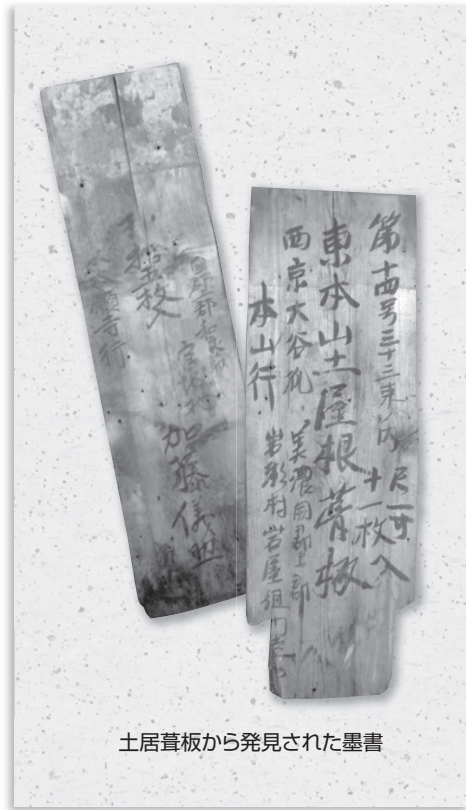


また、土居茸板には数多くの墨書が見られます。内容は「地名・日付・番号」などが記されており、なかには寄進者の名前や製造された場所を示すものもあります。各地で製材された後、京都に運ばれてきており、多くは「美濃國郡上郡（現岐阜県郡上市）」との記載が見られます。

ところで、両堂の土居茸はこれまで述べたように堅牢な造りであっても、一部に屋根瓦の損傷の影響を受けるなどして破損



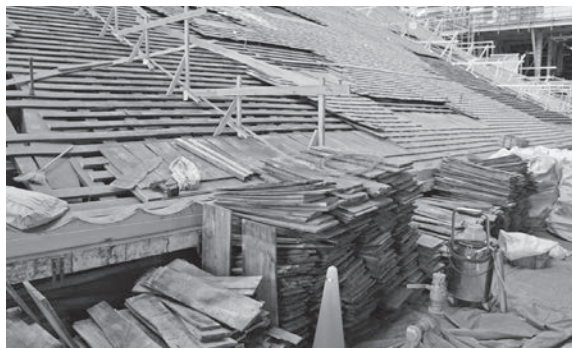
土居茸板から発見された墨書

部分を確認されています。今回の修復では御影堂のように大きな損傷は確認されず、比較的良い状況ではありましたが、腐朽などによって損傷している土居茸は部分的にめくり修復を行います。さらには耐震・構造補強工事で鉄骨等の資材を搬入するための入口を確保するために、さらに部分的に土居茸板をめぐって修復を進めます。

なお、腐朽部分の板については破損部を切断して、目起し加



土居茸板をジャッキアップしながら、一枚一枚丁寧にめくっています



取り外された土居茸板。再利用できるものは、今後加工して葺きなおされます

工（木目を粗くして水分の浸透を防ぐ処置）を施し、在来の葺き厚に合わせて可能な限り再利用をしていくことが検討されています。

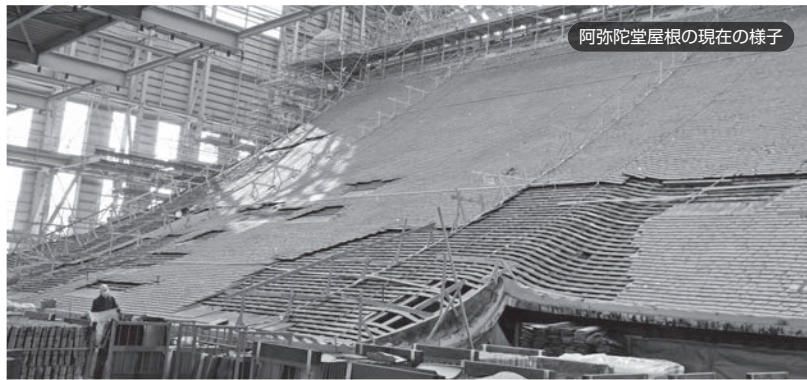
また、取り替える材料については、現状と同等以上の杉の赤身材として十分に乾燥させたものに、目起し加工を施して葺きます。杉の木の中心部分（芯材）は赤みを帯びており、

なかでも色合いの良いものは「杉の赤身」と言われます。これにこだわるのは、成長を終えて細胞が堆積して形成された部位となるため、腐食やカビ、シロアリ等に強いとされているからです。

阿弥陀堂では、この夏に新調瓦を葺き始められるように、下地となる土居茸工事も急ピッチで進められています。



阿弥陀堂屋根の現在の様子



阿弥陀堂屋根に葺かれている瓦葺の下の杉板のことを「土居茸」といいます。この土居茸は下地となる野地板の役割を果たすとともに、建物の内部や木部に雨が染みこまないよう、何枚もの杉板を重ねた構造となっているものです。

一般的に土居茸は「とんとん」や「とんとん茸」とも呼ばれ、三ミリ程度の非常に薄い板を重ねて葺くものですが、御影堂や阿弥陀堂の土居茸板は、一枚の長さが九〇センチ、厚さ一・八〜二・四センチほどあり、しかもこの板を多いところでは五枚も重ね、全体で十センチもの厚

# 御修復のあゆみ

## 〜 伝承された先達の願い

### 阿弥陀堂の土居茸工事がすすむ

みがある堅牢で強固な造りとなつています。また、土居茸板は両堂ともに何本もの洋釘を使って固定されており、明治期

の再建では、当時使い始められたばかりの貴重な洋釘を集めて、丈夫な土居茸を目指していたことがうかがえます。

#### 阿弥陀堂屋根の土居茸板の損傷状況

